

8月中旬の猛暑日、目的地に向かって山を登っていましたが、いやになるほど暑苦しかったです。標高800m以上の尾根に登り切ったら、やっとやわらかな風が時々吹いていたおかげで助かりました。あきる野の夏の山は、そんな感じですね。しかし、年々夏が過ごしにくくなっているのは実感できるかと思います。昔、日本の方に母国の気候について聞かれた時、「夏は40℃を超えますよ」と話したら、「へえ、信じられないなあ」と言われましたが、今の日本もそんな気候に変わってきました。その上、頻繁に起きる災害級の豪雨などで、本当に心配な時代になりました。

暑くてたまらない時の登山は、やはり生き物が支えになります。彼らも頑張っています。無数の天敵に狙われるような中で植物を食べる幼虫たち、食べられるものならなんでも集めて必死に巣穴まで運ぶアリたち、木から木へと必死に虫や木の実などを採食する小鳥たち、地面の枯れ葉の間の餌を探るアナグマなどの哺乳類、器用に気流に乗りハンティングをする猛禽類たち、どれもたくましく素晴らしい存在です。

そんな暑い中で尾根を歩いていた時、ゴジュウカラの鳴き声が聞こえました。市内では、秋から春の非繁殖期はたまに見たり、鳴き声を聞いたりする亜高山帯の印象が強いゴジュウカラですが、繁殖期の終わりの時期にはまだあきる野にはいないとの認識でした。夏なら、奥多摩側などの標高1,000m以上でないと見られない鳥というイメージです。今回の尾根の森林状況は、近年のナラ枯れの影響で立ち枯れ木が多く、猛毒のカエンタケがあちこちで見られました。更に、シカなどの採食圧によって草本などが少ない上、多様性の低いスギやヒノキの植林地に囲まれた尾根筋の二次林です。これらの理由と、近年の高温などの影響もあるためか、以前見られた多くの昆虫類や鳥類などの姿はほとんどありません。いつの間にか、「山の森」は苦しそうな姿に変わってしまいました。悲観的に聞こえても、現実です。しかし、立ち枯れ木が増え、樹木がまばらになり始めた明るい森林は、ある意味、「森の再スタート」を示しているようにも見えんと思います。

今夏に「寒冷な広葉樹林」のゴジュウカラがいたことは少し例外ですが、ゴジュウカラは温暖化の逆風かのように、全国で分布を拡大しているとも言われ、近年の森の変化と関係しているかもしれません。以前は、見る機会が少なかったコサメビタキやリュウキュウサンショウクイといった野鳥も増加傾向にあり、あきる野の代表的な生き物になってきていると同時に、時代の移り変わりの目印となる種類にも見えます。



寒冷な森林の代表的な野鳥であるゴジュウカラ。いよいよあきる野の低山での繁殖もあり？